

までのNEAC2203を諦め、新製品NEAC2230の見積りを出して来る。当時パラメトロン計算素子が大きく喧伝されたためHIPAC102が最後まで候補に残っていた。しかし、これも研究の結果パラメトロンが大飯食らいで仕事が遅い(電力消費量が大きく計算速度が遅い)こと、HIPAC102では計算速度を稼ぐため並列演算方式を採用していることが判った。そのため回路が複雑になり、保守が困難になり、信頼性が落ちることになる。当時は稼働率など信頼性が大きな選定条件で、チェック・ビット(パリティ・ビット)がいくつついているかも問題になった。信頼性が向上し、もはや信頼性が比較検討の対象となくなってきた今日と大きな違いである。

HIPAC102と対照的なのがOKITAC5090で完全直列演算方式で回路が簡単、保守が容易で信頼高く、磁気コア記憶装置と相俟って着々と実績を築きつつあった。しかし何としても計算速度が遅く、切角の磁気コアの特徴を生かし切れていない恨みがあった。富士通信の持って来たFACOM230はVARIABLE WORD LENGTHの一風変わった面白い計算機であったが、新製品と云いながら既に1号機2号機の完成しているNEAC2230と違って、まだ背写真の段階であり、実物を見るのが出来なかったことが弱みとなった。また浮動小数点演算をハード・ウェアでなく、プログラムで処理しなければならぬことに不満をもつ委員の方もあった。

一方NEAC2230は検討した電子計算機の中で最高の計算速度を持つことと共に、その豊富なライブラリー(NEAC2203用に開発されたサブルーチンはほとんどそのままNEAC2230に流用できた)が選定委員を魅きつけた。最後に、記憶容量の不足をカバーするため一万語の磁気ドラムを無料寄附したいという日電からの申し出が決定打となって、投票の結果全員一致でNEAC2230に決定したのであった。

全くの無知から出発した選定委員会(と書いても他の委員の方はお恐りにならないと思う)の一員として、またそれだけに、私は悔なき選定を行ったという喜びと誇りを感じると共に、現在老朽化した旧計算機に限りなき愛着を覚えるものである。

将来計画について

武 部 幹

新計算機はスピード、内部記憶容量等基本的機能は、我々の要望を相当に満足させてくれるものであるが、外まわりがかなり弱いものである。さし当っては、機械をバランスした形で運用するためにも、磁気ディスクとカードせん孔機の増設が望まれる。また図形表示装置も備えつけられれば研究の進展に大きく寄与するであろう。さらに城内ならびに医・薬学部にターミナルを設け、センターとデータ伝送回路で統計計画も早く実現したいものである。

とは云うものの、何しろお金がかかることである。従来諸大学、研究機関の例を見ても、立派な計算機を持っていることと、研究能率が上ることとは必ずしも一致しない。センターの運用方法による時代である。大学は少ないお金で頭を働かして、素晴らしい研究を生み出すべき所であるから、従来小形機の運営の経験を生かして、金沢大学に最もマッチした方式を生み出し、使用経験に基いて研究の溢路となっている所を除々に充実に行けば良いであろう。

情報科学の進歩は早い。金沢大学でどのような新しい研究が開始されるか、利用分野がどのように広がるか、それにより新計算機の拡充の方向、テンポは異って来るであろう。